

# 『色道修行男』試論 — 卷三における趣向の利用について —

福岡依鈴

はじめに

近世期に流行した豆男物の中に、雁金その字『色道修行男』（明和五年〈一七六八〉序。以下『修行男』と略す。全五巻）という浮世草子がある。本作品の序文には、執筆に至るまでの経緯が次のように語られている。

いづれの御時にか、まめ男なんありけり。そのふみ五の巻二通り、鬼神ふしぎの妙作、凡夫のおよぶ趣向にあらず。夫より世下りて二代男といふ、是も又妙に面白かりしかば、これらに双ぶべくもあらずして思ひとまりしに、ちかき世に吾妻男といへる者出来れりしに、おかしきふし、新らしき事共あれど、いにしへにくらべてはやゝ劣れり。それはた、かゝるふしもおこなはるべかめれば、此ま、やむべくもあらず。高き山もふもとよりなれば、千きとのさかひも一はこびよりはじむる修行男

とはいひけらし。<sup>1)</sup>

序文にある「五の巻二通り」は江嶋其磧『魂胆色遊懐男』（正徳元年〈一七一二〉頃刊か）とその後編である同『女男色遊』（正徳四年〈一七一四〉頃刊か）、「二代男」は作者不詳『栄花遊二代男』（宝暦五年〈一七五五〉刊）、「吾妻男」は「ちかき世」に出版されたところから『吾妻男仙伝枕』（明和三年〈一七六六〉序）を指すと考えられる。この四作品と『修行男』では、『魂胆色遊懐男』に端を発する換魂能力と身体の微小性という趣向が共通して利用されている。『修行男』は『魂胆色遊懐男』の系譜に連なる豆男物であり、先行する豆男物から強い影響を受けている作品であるといえるだろう。

この『修行男』については、佐伯孝弘氏「豆男物の浮世草子」<sup>2)</sup>で概要が次のように記載されている。

深川に住む僧・善了は大たわいで歩行も不自由で、親に無理

に出家させられた者。榎稻荷に参詣し、小さな豆休仙人の木像を得る。その像を持ち帰り祈願したところ丸薬を授かり、豆男になって他人の魂と入れ替わる術を得る。仙薬のおかげで足も治り知恵者となった善了は名を豆入と改め、商家の主人や浪人武士、奉公人、芸事の師匠、歌舞伎役者、女衞などに乗り移り、女を寝取るとともに武家や商家、寺などの内情を目の当たりにする。〈中略〉巻四の一の材木屋の娘が入り婿を嫌って手代と不義をする話は、のちに芝居や講談に取り上げられ有名な白子屋一件（一七二六年〔享保十一年〕に、町奉行大岡越前守忠相御役中に訴え出られた事件）をかすめるか。〈後略〉

また、佐伯氏は同論において豆男物に利用される趣向の複雑化を指摘しているが、その中で『修行男』の趣向についても言及している箇所がある。

宝暦・明和の作になると、閨房描写よりむしろ、美人局（『栄花遊二代男』巻五の一）や女衞の巧妙な儼偶（『色道修行男』巻四の二）、お家騒動（同、巻四の三）、先述の実事件（白子屋事件を指す―引用者注）の取り込み（同、巻四の一）など、芝居がかった複雑な筋が目立つ。〈中略〉怪異色を取り込む話も散見する（『栄花遊二代男』巻四の二や『吾妻男仙伝枕』巻五の一の狐、『色道修行男』巻三の二の天狗・山姥など）。〈後略〉<sup>3</sup>

佐伯氏は、『修行男』について複雑な展開の話が多いことを述べ

た上で、巻四の一で白子屋事件の趣向、巻三の二で天狗と山姥の趣向が利用されている可能性を指摘している。だが、あくまで指摘にとどまっており、具体的な考察は行われていない。作品の独自性を明らかにするためには、これらの趣向が活用されている章の内容を多角的に分析する必要がある。特に、佐伯氏が取り挙げた巻三の二に関しては、巻全体で話の内容や要素に明確な繋がりが見られることに着目すべきであろう。このように巻全体で密接な関係が存在する例は、『修行男』の他の巻では見られない。巻三独自の特徴であると考えられる。

以上のことから、本稿では巻三全体の展開の分析を行うことにより、巻三の二にある天狗と山姥の趣向を取り入れたことによる効果を明らかにする。

## 一 『修行男』巻三の梗概

分析に入る前に、本稿で取り挙げる巻三の概要を述べる。

○巻三の一「茶屋の趣向は替狂言」

芝居を見に堺町を訪れた豆入は、雷蔵という人気歌舞伎役者と魂を入れ替え、二の替の芝居を見に来た鬚眉客の女性と性行爲を行う。しかし、豆入の行動によって雷蔵は茶屋の二階の物置に取り残され、舞台に間に合わなくなってしまふ。観客には病欠と説明されたが、その後、雷蔵は本当に病気で亡くなる。

○卷三の二「思寄らぬはるなの六本杉」

豆入は、人気役者では自由に色恋を楽しめないという理由で、中村鹿蔵という高慢な素人役者と魂を入れ替えるが、天狗によって榛名山に誘拐されて義太夫節や歌舞伎を披露させられた上に、榛名山の神である山姥に食べられそうになる。そのため、天狗と魂を入れ替えて山姥を説得し、山姥との性行為を条件に鹿蔵の命を救う。しかし、性行為後に天狗仲間と熟した鉄を飲んだところで目が覚め、山姥や天狗との出来事は夢であったと知る。

○卷三の三「乗て行迎の乗物」

前章で見た夢に驚いた豆入は、鹿蔵の元から逃げ出し、下高の湊町にある、作法の厳しい武家屋敷に移動する。豆入は屋敷に出入りする主人の甥と魂を入れ替えることで妾たちと性行為をしようとする企むが、甥に好意を持つ岡野という高齢の女中が妾のいる屋敷の錠を持っており、岡野を説得しなければ夜の屋敷には入れない状況であった。嫉妬深い上に山姥に似た雰囲気を持つ岡野に嫌悪感を抱きつつも、目的を達成するために岡野と性行為をし、屋敷の錠を開けさせる。その後、魂を入れ替えた豆入は、屋敷中の女性と性行為を行い、妾衆を全て妊娠させるが、甥が腎虚の病に罹ってしまった上に、妾の異常な妊娠について詮議されることになってしまう。最終的に豆入は屋敷の堅苦しさを厭い、退出する。

## 二 『修行男』卷三の二における歌舞伎の要素

卷三の一では、雷蔵という歌舞伎役者を中心に物語が展開される。この雷蔵は、作中で女性たちがどの座の芝居を見に行くか相談をする場面において、「評判は羽左衛門がよけれども、雷蔵が中村座にゐるからと勘三に極り。」と言われており、中村座に所属する、非常に人気がある役者として描かれている。豆入が魂を入れ替える対象として選ばれていることから分かる通り、この章については歌舞伎の要素は重要だといえる。雷蔵は結末部分において、公演に間に合わず、病気という名目で舞台を休むことになる。そして、「神田の燕屋など評判の土板行、らい蔵がかけ落としはわれず病死したとの江戸中ひやうばん。それが先表に成ったかして、とふ／＼ほんに此世をさりし。」とあるように、雷蔵が駆け落ちしたという事実を隠蔽するために、中村座は病死したと発表したのだと噂された後、本当に病気で亡くなってしまふ。なぜ魂を入れ替えたことによる齟齬だけでなく、このような後日談が描かれたのであろうか。この問題については、現実の歌舞伎界の動向と関連があると考えられる。

『修行男』が執筆されていたと推測される明和四年（一七六七）頃に刊行された役者評判記を見ると、自笑著『役者御身おみみ杖づえ』（明和四年三月刊）の「立役之部」に、『修行男』の雷蔵と同名である市川雷蔵という役者の評判が記載されている。

上上吉 市川雷蔵 中村座

明和四年亥四月十二日

頭取曰、此度は山田の三郎なれど、米搗と成、五郎が短気を

蓮花院詠行 俗名市川雷蔵

行年 四十四才<sup>⑥</sup>

とごめ、少将が恋を取持、次に松若を害せんとする忍びの者を殺し、祐経が館へ来り曾我兄弟満江に逢。風折が弟と名のり兄弟に力を添らるゝ所大てい。二ばんめは二役男だて本朝綱五郎と成、高円梅若がなんぎのばへ出、半時九郎兵へと立入よし、次に淀や辰五郎が酒狂の踊をきのどくに思ひ、鯉の作り物にする百両を鯉小判と取かへ、其金紛失故めいわくせらるゝ、仕内よし。いまだ病氣全快なき故はきくとせず。御養生めされよ<sup>①</sup>。

『役者御身拭』から、市川雷蔵が中村座所属の立役者であること、演技を高く評価されているが病気で体調を崩していることがうかがえる。

また、市川雷蔵の項には書かれていないが、『役者御身拭』の挿絵によれば、この時市川雷蔵が出演していたのは正月廿三日開演の「初商大見世曾我」である。この興行について、『歌舞伎年表』では、二番目に登場する綱五郎役について、雷蔵の病気を理由に同じ中村座の高麗蔵が代役を務めたと記されている<sup>②</sup>。そして、自笑著『役者党紫選』(明和五年(一七六八)正月刊)によれば、市川雷蔵は明和四年四月に亡くなっている。

一扱ちよと御断申上まするは、江戸中御ひいきの立役、去夏遠い芝居へ参られました故替名を申上まする。

「初商大見世曾我」の病欠(正月廿三日以降)から亡くなるまでに他の興行に出演していた記録も『歌舞伎年表』で見られないことから、「初商大見世曾我」が最後に出演した、あるいは出演が予定されていた芝居であったと考えられる。

このように、中村座の人気役者であり、正月の二の替の芝居を病欠した後に亡くなっているという点が、『修行男』の雷蔵の特徴と完全に一致している。『修行男』では、市川雷蔵という実在した人物を登場させているといえるだろう。ただし、管見の限りでは市川雷蔵が駆け落ちをして芝居に出なかったという噂が書かれた文献は見つからず、実際にこのような風説が流れていたかどうかは不明である。現時点では、巻三の一は、市川雷蔵が芝居を病欠しそのまま亡くなったという事実を、豆男物の趣向を付加しつつ脚色したと推定せざるを得ないだろう。当時話題となっていたことに豆男物の趣向を組み入れることで、読者の関心を惹こうとした可能性が考えられる。

では、巻三の二ではどのように歌舞伎の要素が用いられているであろうか。まず、豆入がはじめに魂を入れ替えた中村鹿蔵については、人気役者であった雷蔵と異なり「末の役者」と説明されている。

「そも／＼末の役者中村鹿蔵と云は中詰以下の者にて、一番目の切に侍ども取まけといふ時、人並に出て二三度とつて投られ、二番目には男だての数に入れて人のしたまねをかわり／＼して、なぶられてふまれてひつこみ、役目もそれ切にて仕廻て、〈後略〉」  
当時の役者評判記には中村鹿蔵という役者の名は見られず、モデルと特定できる役者も見当たらない。市川雷蔵のように実在する人物が登場しているわけではなく、架空の人物であると考えられる。次に、この鹿蔵を天狗が連れ去った理由については、以下の通り述べられている。

されば此所へ鹿蔵を誘引させつるは、此麓に年経て住居する山の神、先だつて願を出し、芝居役者の中にて随分賢精つよき男を一人さづけ給へと妙義権現へねがふによつて、われ／＼仰を蒙る所、名あるたて者は田舎の山うばには過物なれば、中詰已下の中、高まんの者ありやと尋る所、此鹿蔵、竹本政太夫が弟子にて、義太夫をこのみ、さのみふしはこまかならねど、我声すぐれてよろしきと思へり。此慢心、我らがうかがふ所にして、すなはち今日めしよせたり。〈後略〉

鹿蔵は自分の義太夫語りに慢心していたために、天狗によって山姥の元に連れてこられたとされている。高慢の罪で天狗道に墮ちてしまった天狗と鹿蔵を結びつけるための設定であろう。高慢な点以外でも、作中で天狗に対し山姥が「こさんのやうな鼻の見事な人を

みては、どふかぼんのふがおど」と述べたり、天狗の男性器を見た豆入が「鼻に似合ぬ天狗どの、一物、人間に左のみかわらず」と評価するなど、鼻の長さから男性器が大きいと認識されており、「随分賢精つよき男」である鹿蔵との類似性が見られる。好色という要素でも役者と天狗が結び付けられていると考えられる。<sup>7)</sup>

なお、鹿蔵の義太夫語りの師匠として、実在する竹本政太夫の名が挙げられているが、『義太夫年表』によれば、明和三年から四年にかけて、三代目竹本政太夫の名跡相統について紛糾があったという<sup>8)</sup>。以下、『義太夫年表』の記述の元となった四代目竹本長門太夫『増補浄瑠璃大系図』を掲げる。

明和となる同式年七月十日、師政太夫事死去致され候後、中太夫事東京にあつて、師の遺言と申て、押て政太夫を名乗候事、大坂にては門弟中彼此と申立候中にも、土佐太夫事は高弟なる故、我こそ政太夫を名乗べき者として大阪表にて土佐太夫改政太夫披露致すに付、其比源七染太夫は中古の名人にて人気昇るが如く、尚また鼻眞組よりすゝめに寄て、是又政太夫と名のり候事、大坂東京両所に於て政太夫三人出来。〈後略〉

二代目竹本政太夫が亡くなった後、弟子である竹本中太夫・竹本土佐太夫・源七染太夫（竹本染太夫）の三人が、三代目竹本政太夫を名乗っていたとされる。中太夫が江戸で活動していることを踏まえると、この状況が江戸でも話題になっていた可能性は十分にある。

当時話題となっていたことを取り入れるために、鹿蔵に竹本政太夫の弟子という設定を付した可能性もあろう。

また、天狗に芸を請われる場面、実在する浄瑠璃や歌舞伎の演目、役者についても言及されている箇所がある。

「いまだ妙義へ申上るうち問もあれば、彼自慢する義太夫た、今かたれ。いざ聞かん」とのたまふに、〈中略〉〈豆入は〉青柳硯の二の切一段語るに、座中かうべをうなだれ聞よふす。〈中略〉「いざ新らしき事を今一段所望〜」と好まれて、ぜひなく又々はじめて、忠臣講釈の浮はしと縫殿介が道行の所を語しに、何も感心のてい成しが、「此上両芝居の役者のこわいろ」と望れ、「是は存ませぬ」といつても、「所に住でしらぬ事は有まじ。ぜひ〜」と望れ、あまりじだひせば、いか成恐しきめにあわふもしれずと、「似ませぬ所はお目ながに」と断申て、少長・団十がかけ合つかつてみれば、杉の梢の夜嵐もうけとつたりやといふやうにひゞいて聞ゆ。「まつ〜」とせがまれ、市むらの太夫が狐の所、其外路考・薪水など有たげつかつて、「もふござらぬ」といふうち、〈後略〉

「小野道風青柳硯」・「太平記忠臣講釈」などの演目、役者の俳優などが数多く挙げられている。「太平記忠臣講釈」の道行について触れられている点については、明和四年二月十三日より市村座上演されていたことが影響していると考えられる。この上演が江戸

の歌舞伎では初演であり、元となった浄瑠璃の「太平記忠臣講釈」も明和三年に大坂で上演されたものが初演であるため、作中の「新らしき事」という言葉はこの事実に沿っているといえるだろう。他にも、「市村の太夫が狐の所」については、『歌舞伎年表』に市村羽左衛門が明和四年に「曾我 和 曾我」（正月十五日開演）で狐の役を演じたことが記されている。この演技については、『役者御身拭』にも評価が見られる。

頭取曰、此度は祐成にて、兄弟連立傘小挑燈さげて出、柳に蛙の飛付を見て、心を尽せば虫だにも念力を通すと、道風に思ひ入よし。つるが岡の富に当り五百兩の金を受、取、花道にて祐経が刀のつかに財布の紐かゝりしを、暗り故敵共しらず。後に挑燈の紋所にて祐経かと驚き立帰る場よし。次に、金故敵の館に擲と成、義経の姿にて世帯業のやつし大い。二役、狐にて二人、忠信は、市紅よりよいとの評判。椎の木のごぼんを割、河津が矢の根を出し、忠信が血汐にて時宗に力を付る所よし。〈後略〉<sup>12)</sup>

狐が忠信に化けて二人の忠信が登場する場面については、「市紅」即ち市川團藏よりも演技が良いと評価されている。また、「曾我和曾我」以降も、「義経千本桜」（七月二十五日開演）で市村羽左衛門は狐役を演じている。これらの狐の演技の評判を受けた描写であることが想定される。

こゝまで分析したことを踏まえ、卷三の一と二では明和四年頃の歌舞伎界の流行を踏まえた展開となることが分かる。

### 三 『修行男』卷三の二における山姥の趣向

卷三の二では、鹿蔵を食べようとする山姥が登場するが、この趣向と歌舞伎の間に関連性は見られるであろうか。

この山姥について、作中では次のように述べられている。

枯木のあらくましきを杖につき、髪の毛は白く黄ばみたるをうちかぶり、眼は蒼光にして、口は耳の根までひろく、おはくろに染りし齒、肉落てはぐきあらはに、左右に牙をかみ出し、二目とは見にくい婆々よろめき出て、「是はく、我ら願のものを授給はりし事、宜しく御礼頼ます。こさんにもいかいおせわしんどでござりつらめ」といふに、此天狗、「さればく、江戸の堺丁迄往て、女形のまねをしてつれて来ました。扱鹿蔵を今夜はしつぽと貴さまだいてねる気か」といへば、「さらくそふした事にあらず。色事は此まへ金平をもふけて後、子どもおのせわがふつくいやさにやめました。しかし、今でもこさんのやうな鼻の見事な人を見ては、どふかほんのふがおどります。鹿蔵を願ってもらいましたは、むかしくは世の人が正直で、ひとみくうとて年々に喰物をあてがい、あるひは廻国武者修行などたべ物もあつたが、此近年なま物なく土餌の仕合、夫故力

もぬけはてたから、ばぶが食事にお願申た。晩には鹿蔵を引きてあたまからしてやりませふ。したが其口へは四方があかと出かけずば成ますまい」と（後略）

山姥が容姿の醜く好色な一面のある老婆であり、かつて坂田金平の母親であつたことが説明されている。ただし、坂田金平の母親が山姥であるという設定の作品は、金平浄瑠璃をはじめとした金平の活躍が描かれた文献には見られない。父親である坂田金時の出生譚と混同しているか、誤記である可能性が高い。

『修行男』における金平の母親が山姥であるという設定は、どの作品から影響を受けているのであろうか。前述のように金時を金平と誤記したと仮定し、金時の母親が山姥である設定が重要な意味を持つ先行作品を見ると、近松門左衛門「嫗山姥」（正徳二年（一七一〇）以前初演か）がある。「嫗山姥」四段目では、坂田金時の母親である萩野屋八重桐について、以下の通り述べられている。

我もとは遊女の身。坂田の何がしと幾世をかけし契の中、おつとの父を物／部と云者に討せ、其の敵討ん為、あかぬわかれのあづさ弓。おつとの運命つたなくて、妹にせんこされ、親の敵を討ぬのみか、其こと故に、源氏の大將漂泊の御身と成給ふ。「今生の此身にて此鬱憤晴がたし。腹かき切てこんばく汝が胎にやどり、日本ぶ双の大力、一き当千の男子と生れ、敵の余類をほろぼさん」と天にうつつたへ地にさけば、ちかひのやひばに

ふしたりし。それより我身もたゞならぬ子をもち月のかげふかく、人倫はなれし山にこもれば、いつのまにかは山めぐり、一念の角そぼだち、眼にひかる邪正一如と見る時は、鬼にもあらず人にもあらず、名は山姥が山めぐり。〈後略〉<sup>14</sup>

八重桐は元遊女であり、夫である坂田時行の魂が宿った子を妊娠した際に人ならざる身と変化し、山奥に住むうちに山姥になってしまったと説明されている。あくまで設定だけの存在ではあるが、八重桐が遊女であったことから、山姥と好色・色・恋との関連性は認められる。また、「嫗山姥」に強い影響を与えた作品である能「山姥」でも、百魔山姥（百万と表記される箇所もある）という遊女と本物の山姥が登場する。

ワキ「是は都方に住まの仕る者にて候。又是にわたり候御事は、百魔山姥とて隠れなき遊女にて御座候。か様に御名を申謂れば、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作り御歌ひ有により、京童の申慣らはして候。」〈中略〉

百房「恐ろしや月も木深き山陰より、その様化したる顔げせば、其山姥にてましますか」<sup>シテ</sup>「逆もはや穂に出で初めし言の葉の、気色にも知らしめさるべし、我にな恐れ給ひそとよ」<sup>百房</sup>「此の上は恐ろしながらうば玉の、暗紛より現れ出る、姿言葉は人なれ共」<sup>シテ</sup>「髪には棘の雪を戴き」<sup>百房</sup>「眼の光は星のごとし」<sup>シテ</sup>

「扱面の色は」<sup>百房</sup>「さ丹塗りの」<sup>シテ</sup>「軒の瓦の鬼の形を」<sup>百房</sup>「今

宵始めて見る事を」<sup>シテ</sup>「何に譬へむ」<sup>百房</sup>「いにしへの」〈後略〉<sup>15</sup>  
山姥の曲舞を得意とするために百魔山姥と呼ばれた遊女と、本物の山姥が出会い、共に舞うという展開が描かれている。先行する能「山姥」でも、遊女と山姥には繋がりがあるといえるだろう。

なお、この二つの作品における山姥については、永井啓夫氏「『山姥』における「役」の構造——八重桐を中心として——」<sup>16</sup>でも考察がなされている。永井氏は、八重桐が元遊女であるという設定は能「山姥」の百魔山姥のパロディであり、能「山姥」で描かれた山そのものとしての山姥と、金時の母としての山姥とを結びつける要素であったと述べている。この二つの作品の認知度が高かった近世期において、山姥と遊女を結びつける風潮があった可能性は十分にある。また、遊女から好色との関連性も導き出せるのではないだろうか。

以上のことから、『修行男』における山姥の設定は、能「山姥」や浄瑠璃「嫗山姥」などの先行する演劇から趣向を得ていると考えられる。天狗・山姥が登場してはいるものの、巻三の二は佐伯氏の述べていた怪異色を取り込んでいるというよりは、巻三の一から見られる歌舞伎との繋がりがから、演劇の趣向を利用していったというべきなのではなからうか。

#### 四 『修行男』巻三の三の老婆と山姥の関連性

では、巻三の二の趣向は、巻三の三とどのような関連性があるの

だろうか。本節では、卷三の三の展開からその意味を考察していく。

卷三の三では愷気深い岡野という老婆との性行為を中心に物語が展開していくが、岡野については以下のような描写がされている。

此おくに岡野といふ局、やかましいば、にて錠口きびしく、御夜詰がすぎるとびんと錠おろして、いかな／＼嘉内がきりやうにも力にも是計は叶はず、胸をこがすのみ也。此きびしいにもいわく有り。此岡野、常々嘉内が色男にふかくなづみ、つけ廻事は、嘉内もがてんなれ共、いかにしても此ば、としは六十計、しらがあたまにひたゐわたいやらしく、しわだらけの手にて思はくらしく手を握るなど、去とはうるさく、〈中略〉夢にみし山姥の佛に似かよひ、きみはわるけれ共、〈後略〉

岡野は六十才程の醜い老婆であり、後に豆入が魂を入れ替える嘉内を慕うあまりに妾衆との接触を阻む愷気深い女性であるとされている。醜い老婆でありながらも好色な一面を持つという点では、卷三の二の山姥と共通しているといえるだろう。

豆入が山姥の面影を岡野に見出したこと、性行為の際に「この頃の不仕合、とかくば、に縁あるも、此程の夢の告、正夢に成ったか」と、山姥と会った夢を予知夢と認識していることを踏まえれば、卷三の二の山姥の趣向は次章で現実の老婆との性行為を描くための布石でもあったと考えられる。

## 五 『修行男』における趣向の利用について

ここまで、卷三の各章ごとに利用されている趣向や全体の展開について考察を行ってきたが、現実の歌舞伎役者を実名で登場させていたり、実在する演劇作品の名を列挙したりするなど、趣向の元となった事物を露骨に示している印象を受ける。

この点については、本稿で取り挙げた部分だけに見られる特徴ではない。佐伯氏が白子屋事件との関連性を指摘した卷四の一「二度目の婚礼は帰新参」では、材木商の放蕩娘という事件関係の趣向以外にも、『魂胆色遊懐男』の趣向を流用したと明確に示されている箇所が存在する。

されば／＼、今甚兵へ、男も大がいなる生つき。人附合もはづかしがらず、何ふそくもなけれ共、一たい殊の外のよはむし。一義のせつ、いつとも門口で御礼申て、一義にのぞまんとすれば、はやぐはた／＼と気がゆく故、こんれいして一度もおとめはよいめにあわず。〈中略〉太平記読で気をうつさぬといふしかたも「ふところ男」といふ本でよんで聞たれど、まさか夜の夜中おふくろも聞るゝにそふもならず、〈後略〉『修行男』

これの旦那は、見かけあのごとく堅固にしてずいぶん強手な作りなれ共、どふした前世のむくいやら、一義にとりかゝつて玉門の端へ一物をよせらるゝとはや氣をやつて、いつも門口で

お礼申て、ついに一つきつかれた事も無いにより、内儀此家へよめりして来られし晩より今五年があいだ一度もよいめにあはれぬゆへ、不断こゝろに不足たへず、まめしげがなさにていしゆへのぶあしらい。〈中略〉何ぞ物にまぎらかして一つに心をうつつさずして見るべしと、太平記の本をとぢめはなして一枚く寝所の天井にはりをき、内儀の上につて一物をさしこまゝる、よりあをのいて、天井の太平記をちう音でよまる。〈魂胆色遊懐男』巻四の二「おかさまに思ひ出をさし枕」〉

見た目はたくましい男性が早漏であることに妻が不満を感じているという設定や、その対策として太平記を読み上げて気を紛らわそうとする展開など、明らかに趣向を『魂胆色遊懐男』巻四の二から流用しているだけでなく、作品名まで挙げている。他の豆男物でも、明らかに先行作品から趣向を流用した話は数多く存在するが、具体的に作品名まで挙げている例はごく僅かである。『修行男』巻三の二のように役者を主題とした話についても、『女男色遊』巻二の二「あいの襖子はさしあいの参宮人」や『栄花遊二代男』巻三の二「娘と後家に恍惚らるゝ年は若女形」に見られるが、『修行男』のように実名で登場させてはいない<sup>16)</sup>。他の豆男物と比較しても、『修行男』は分かりやすい形で趣向の流用元を述べていると考えられる。

では、元となった事物を明らかにすることにはどのような意味があるのだろうか。京都に在住していた江嶋其磧が執筆していた可能

性が高い『魂胆色遊懐男』・『女男色遊』より後に成立した豆男物浮世草子は、江戸で出版されたと推定される作品が殆どであり、読者の多くは江戸に住む人々であったと考えられる。依拠した作品を作中で明示することで、豆男物の知識が薄い江戸の読者に何が基となっているかを理解させる狙いがあったのではなからうか。また、江戸の人気役者や話題となった歌舞伎の趣向を取り込んだのも、江戸の読者を多分に意識していた可能性が十分に考えられる。

### おわりに

本稿での分析により、『修行男』巻三の一は実在した市川雷蔵の話題を基に構成されていること、巻三の二の山姥は能「山姥」や近松の浄瑠璃「嬭山姥」から趣向が得られていることが明らかとなった。これらの章は、演劇分野から強く影響を受けているといえるだろう。巻三の三については、前章にあった山姥の趣向を利用していると考えられる。巻三は人気役者から素人役者、山姥から醜い老婆というように、趣向を連鎖的に活用しているのである。

また、『修行男』巻三や巻四の一では、趣向を利用した作品や出来事について、誰にでも分かるように描写していることについても指摘を行った。これは、読者として想定される江戸の人々を意識し、豆男物の知識に疎くとも趣向の元となった作品を理解できるようにしたのではなからうか。この点は、京で出版された『魂胆色遊懐男』

とは異なるといえるだろう。出版地による執筆意識の差異は、今後  
も検討する必要がある。

今後の課題としては、本稿で取り上げることができなかった巻三  
以外の箇所について、どのような趣向が用いられているか、また元  
となった作品や出来事との関連性がどの程度認められるかについ  
て、より詳細に分析を行うことが挙げられる。また、『修行男』序  
文で「いにしへにくらべてはや、おとれり」と評された『吾妻男仙  
伝枕』との相違についても、比較・考察を通して明らかにしていき  
たい。

### 【注】

(1) 『修行男』の諸本は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベ  
ス」(<http://base1.nijiac.jp/~tokoten/>) によれば、東京大学附属図書館霞亨  
文庫(巻四のみ)、京都大学附属図書館大惣本(全巻)、天理大学附属天  
理図書館(全巻)に伝存が確認されている。本稿における『修行男』の  
引用は、天理大学附属天理図書館蔵本の本文に拠る。

『修行男』(天理大学附属天理図書館蔵本〈請求番号・九一三・六二ノイ  
三六五〉)の書誌は、次の通りである。

書型、横本、五巻合一冊。刊本。縦二一・五cm、横一八・五cm。外題、  
表紙左肩に題簽「色道修行男一」。目録題、「色道修行男/目録一(一五)  
之巻」。内題、なし。序、巻一にあり。末に「作者/雁金/その字/果報  
は/ねのとし/初春の/笑ひぞめ」との記載あり。跋、なし。末尾に『修  
行男後日廻国色行脚』出版予告あり。

なお、句読点は私に改め、適宜濁点・半濁点を施し、振り仮名は省略し、  
引用中に私に施した注記は〈〉に入れた。他の文献の引用についても同  
様である。

(2) 飯倉義之編『怪異の時空2 怪異を魅せる』(二〇一六年二月、青弓社)  
所収。

(3) (2)に同。

(4) 役者評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第二期第九巻(一九九〇年、  
岩波書店)、三四頁。

(5) 伊原敏郎『歌舞伎年表』第四巻(一九五七年、岩波書店)、三三頁。

(6) (4)に同、九五頁。

(7) 天狗と好色については、江嶋其碩『風流曲三味線』三之巻第一「仕過し  
の天狗中間」でも関連性が見られる。この章では、『好色一代男』の世之  
介をはじめとした好色浮世草子の登場人物たちが天狗となって現れ、「好  
色一道我レ知顔に高慢せしより、かゝる魔道におちいりぬ。」(『八文字屋  
本全集』第一巻、一九九二年、汲古書院)、三三二頁と述べている。

ちなみに、『風流曲三味線』や『修行男』にある天狗の趣向は、『太平記』  
巻第二十五「天狗直義の室家に化生する事」の、天狗が集まり悪事の相  
談をする場面から得られていると考えられるが、近世期までに『太平記』  
の天狗の趣向がどのように享受されてきたのかは現時点では不明である。

(8) 義太夫年表近世篇刊行会編『義太夫年表 近世篇』第一巻〈延宝〜天明〉  
(一九七九年、八木書店)、三八九頁。

(9) 演芸珍書刊行会編『音曲叢書』第三編(演芸珍書刊行会、一九一四年)  
所収木谷蓬吟校訂『増補浄瑠璃大系図』、八頁。

(10) (5)に同、四一頁。

(11) (5)に同、三六頁。

(12) (4)に同、四四頁。

(13) (5)に同、四三頁。なお、「曾我和曾我」は台帳未見のため具体的な内容が不明であるが、狐が化けていた人物の名(忠信)が「義経千本桜」と共通しているため、「義経千本桜」の狐忠信の趣向を利用していたと想定される。

(14) 近松全集刊行会編『近松全集』第七卷(一九八七年、岩波書店、七二五頁。なお、節、詞の表記は省略した。

(15) 西野春雄校注『新日本古典文学大系 謡曲百番』(一九九八年、岩波書店、一六一頁、一六四頁。なお、節、詞の表記は省略した。

(16) 永井啓夫「嬬山姥」における「役」の構造―八重桐を中心として―(『語文』第五〇号、一九八〇年六月)。

(17) 『八文字屋本全集』第三卷(一九九三年、汲古書院、六二頁。

(18) ただし、『女男色遊』巻二の一については、挿絵に「太夫／都万太夫／早雲座」と記載されている。長谷川強『浮世草子考証年表』(一九八四年、青雲堂書店)によれば、都万太夫座の名代であった早雲長太夫を指すという。だが、『修行男』と異なり、作中に登場する「もじの太夫」という人物が都万太夫座に所属していたという記録は見られない。

(19) なお、長谷川強氏は、『浮世草子研究』(一九六九年、桜楓社)「終章 後期江戸文学との関係」において、宝暦・明和期に江戸で出版された浮世草子では、『魂胆色遊懐男』の趣向を継承した作品が多く見られることを指摘している。

〔付記〕

『修行男』の複写をお許し下さった天理大学附属天理図書館に対し、御礼申し上げます。

— ふくおか・いすず、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—